



《愛染明王像》(田万コレクション)

美をつくし

vol. 189

大阪市立美術館だより
平成30年3月1日発行

MI WO TSUKUSHI
MI WO TSUKUSHI

江戸の戯画 — 鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで

2018年4月17日(火) — 6月10日(日)



太平の世が長く続いた江戸時代には、多くの戯画が描かれました。一口に戯画といっても多種多様なものがありますが、本展では「鳥羽絵」をキーワードに江戸時代の戯画をご紹介します。

滑稽な人物を軽妙な筆致で描いた鳥羽絵は、18世紀の大坂で鳥羽絵本として出版され人気を博しました。その人気は近代にまで及んだと考えられています。また、大坂に留まらず、江戸の浮世絵などにも影響を与えています。鳥羽絵を洗練させたと言われる大坂の「耳鳥斎」はもちろんですが、鳥羽絵本の影響を受けたと考えられる江戸の「北斎」や「国芳」、そしてその流れをくむ「暁斎」など、時代や地域により変化しながらも、鳥羽絵に見られる笑いの感覚は脈々と受け継がれています。

例えば、鳥羽絵本のうちの一つ『軽筆鳥羽車』には、魚の頭を拝む人々を描いた図(写真①)があります。おそらく、「鯛の頭も信心から」という諺を絵画化したものなのでしょう。数珠を持った男たちが魚の頭をうやうやしく拝む姿が滑稽です。これとそっくりの図を北斎も描いています(写真②)。多少の違いは

ありますが、北斎が『軽筆鳥羽車』を参考にしていることは明らかです。大坂で出された鳥羽絵本が、90年ほど後に江戸の浮世絵師である北斎に影響を与えているのです。

このように鳥羽絵からの流れを追うことが本展の目的の一つではありますが、それと同時に人気絵師たちが描いた楽しく優れた戯画も存分に堪能していただきたいと考えています。なかでも、戯画の名手として知られる国芳の浮世絵は見どころの一つです。本展では、擬人化された金魚の仕草が愛らしい「金魚づくし」シリーズ9図が世界で初めて勢揃いします(写真③)。全てが揃うのは、前期(4月17日～5月13日)だけですぜひお見逃しなく。

その他、18世紀後半の大坂で活躍した耳鳥斎や、幕末から明治に掛けて活躍した暁斎(写真④)など、人気絵師たちによる約280件の戯画を通して江戸の笑いの世界をご紹介します。笑いを文化として培ってきた大阪の地で、多彩な戯画の世界をぜひお楽しみください。

(秋田達也)

①『軽筆鳥羽車』 千葉市美術館

② 葛飾北斎「鳥羽絵集會 魚頭観音」 ベルギー王立美術歴史博物館

③ 歌川国芳「金魚づくし ぼんぼん」 個人蔵

④ 河鍋暁斎「風流蛙大合戦之図」 河鍋暁斎記念美術館 ※5/29-6/10 展示

師古齋コレクション『漢魏雜存』について

— 中国彫刻をめぐるささやかな近代史 3 —

大阪市立美術館は岡村蓉二郎氏(1910-91)が収集あるいは自ら採拓した中国金石の拓本約450件を師古齋コレクションとして収蔵しているが、その中には石造仏教・道教像の図様も少なからず含まれている。

今回紹介するのは『漢魏雜存』と題された拓本帖の一葉である(挿図・註)。造像の正面下部及び側面の計3箇所からなる拓本で、上半部には岡村氏による採拓にあたっての顛末や紀年銘に関する考察が記されている。その内容を、登場人物について補足しながらまとめると概ね次の通りである。

(採拓した)この造像は、中華民国陸軍大学教官、満洲国軍政部最高顧問や陸軍北支方面軍司令官を歴任した多田駿氏(1882-1948)が所蔵するもので、北京で成立した中華民国臨時政府及び華北政務委員会の首脳であった王克敏氏(1873-1945)より贈られたと聞いている。私(岡村氏)は本像を昭和16年(1941)6月に多田氏の留守宅において、子息の顕氏(後に千葉大学等で教鞭を執った経済学者)の好意により採拓することがなかった。向かって右上の拓片にある紀年銘は北齊の元号「武平」なのか北魏の「武泰」なのか判別しがたいが、本像には北京公使館書記官や南京総領事を歴任した外交官であり、満洲国外務局情報部長も務め、美術コレクターとしても知られる須磨弥吉郎氏(1892-1970、書齋を梅花草堂と名付けた)の観記が附属し、そこでは「武平」としている。しかし私は「武泰」と読むと判断したのだが、その後に兵庫・芦屋の山口家で本像と同じ様式の造像を見た時に疑念が払拭された。

以上のように多くの人物が登場する興味深い文章で、中国の高官から多田氏へ仏像が贈答されたこと、その作品を多田氏が日本の美術コレクターの鑑賞に供していたことがわかる。さらに芦屋の山口家とは、本館蔵山口コレクション中国石造仏教・道教彫刻を収集した山口謙四郎氏(1886-1957)と推測される。多田氏が山口家で観た「同じ様式の造像」は確認しえないが、本館蔵・山口コレクションに含まれる北魏・延昌4年(515)銘石造道教三尊像の可能性が高いかもしれない。なお多田氏自身も明・清時代の兵法書を収集したことで知られ、没後に子息の多田顕氏から早稲田大学へ寄贈されてい

る(宝籟室文庫)。このように本館蔵・師古齋コレクション『漢魏雜存』は、第二次世界大戦前夜における肩書や立場をこえた美術コレクターのネットワークを垣間みることができる貴重な資料といえるだろう。

さてあらためて拓本をみると、本像はその銘文から少数民族の羌族をルーツとする鉗耳氏が、北魏・武泰元年(528)に造立したものであることがわかる。図様は造像の正面下部にあたり、垂下する衣を均質な平行多線文を用いながら極めて装飾的に表しており左右端はくるっとカールしている。こうした独特な衣文表現は、北魏(5世紀前半)の陝西省西安とその近郊に分布する一群の仏教・道教像と共通していることから、本像の原所在地も同地域と考えられる。残念ながら現時点で本像の所蔵先は不詳であり実見することはできないが、これからも細々とではあるがその行方を追いつきたい。

(註)『大阪市立美術館紀要 中国金石拓本目録』1978年における表記は、「449『漢魏雜存』(14)□耳造像記」である。

※ 機関・肩書等の名称は当時のまま表記している。

(齋藤龍一)



洋画と日本の風土

2018年4月17日(火)ー5月13日(日)

明治以来、常に西洋の新しい芸術思潮の影響のもとに発展を遂げてきた日本の洋画壇ですが、日本の風土と切り離したい性質の主題、表現を通して独自の画境に達した画家も少なくありません。洋画家らが向き合った日本風土の光と影を追いかけてみます。



《野と子供》 中川紀元 昭和7年(1932) 本館蔵(白川朋吉氏寄贈)

ひやっかりょうらん 百花繚乱 日本の漆工

2018年4月17日(火)ー5月13日(日)

やわらかな陽射しのもと、かたく閉ざしていた植物の蕾は徐々にほころび、次々に開花しはじめる頃合いとなりました。今回の展示では、季節の花々や草木に身を包んだ漆工品



国宝《菊唐草蒔絵螺鈿手箱》 南北朝時代・14世紀
和歌山・熊野速玉大社

を中心に紹介いたします。おだやかな春のひととき、草花の神秘的な生命力を感じつつ、気ぜわしい胸中や愁いに沈む気持ちを慰め、心なごやかに楽しんでください。

鉄：クロガネの美

2018年4月17日(火)ー5月13日(日)

鉄は錆びやすく取り扱いに注意を要しますが、鋭利で強靱な鉄製刃物は利器としてきわめて有用です。工芸品には安定した黒錆を人為的に生じさせた鉄が用いられたほか、赤錆により荒れた肌もまた好まれました。ここでは鉄を素材とする刀装具や茶釜を中心とする金工品をご紹介します。力強くも侘びたクロガネの美の世界をご堪能ください。



《鉄金象嵌 若竹文透彫鏝》
江戸時代・17-18世紀 本館蔵(岸本真之助氏寄贈)

炎をまとう尊像 — 明王・天部 —

2018年5月15日(火)ー6月10日(日)



明王とは、煩惱に捉らわれて迷う人々を屈伏させ教化する、密教特有の尊像です。一般にその姿は、怒りの形相で手には武器を持ち、燃え盛る火炎に包まれたさまに表現されます。また仏教の護法神である天部のうち火天など、炎をまとう尊像についてご紹介致します。

《尊勝曼荼羅》 鎌倉ー南北朝時代・14世紀
大阪・叡福寺

江戸禅僧の戯画

2018年5月15日(火)ー6月10日(日)



《布袋画賛》 仙厓義梵 江戸時代・19世紀
大阪新美術館建設準備室

江戸時代の高僧たちは、大衆の教化を進める手段の一つとして数多くの書画を制作しました。なかでも駿河の白隠慧鶴(1685-1768)と博多の仙厓義梵(1750-1837)は、ともに臨済宗妙心寺派の僧で、個性的な禅画を数多く残しました。このたびの特別展に合わせ、大阪新美術館建設準備室所蔵品から、両者の「戯画」とも呼ぶべき楽しい作品を展示します。

かんぼくろうこう 翰墨流香 — 清時代の書画

2018年5月15日(火)ー6月10日(日)

清は1912年に中華民国が成立するまで約270年続いた中国最後の王朝であり、その歴史とともに書画家は多彩な作品を生み出しました。本展では、清の最盛期といわれる康熙・乾隆朝から激動の清末に至るまでの書画を中心として展覧します。また、日本とかかわりの深い来舶清人の作品も特集します。



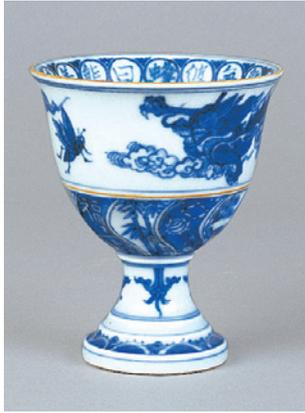
《藤花図(花卉図冊のうち)》
張熊 清時代・咸豐元年(1851) 本館蔵

りょうふうきつさつ

涼風颯々 夏のやきもの

2018年7月6日(金)ー7月18日(水)、7月31日(火)ー9月1日(土)

世界を魅了するやきものは、土と火、そして人びとの技によって脈々と育まれてきました。本展では、江戸時代の陶工永楽保全(1795-1854)の作品をはじめとする陶磁器の数々を紹介いたします。清々しいそよ風の吹き抜けるような、涼やかな作品の世界をお楽しみください。



《染付 蜂籠文高足杯》永楽保全
江戸時代末期・19世紀
本館蔵(田万コレクション)

古代イタリアの息吹 —エトルスク美術—

2018年7月6日(金)ー7月18日(水)、7月31日(火)ー9月1日(土)

エトルスク美術とは、イタリア中部のエトルリア(現在のトスカーナ地方)を中心とした、古代民族エトルリア人の美術活動や作品のことです。彼らは前10-前8世紀に12の都市国家を作り、ローマ人に征服されるまでの数世紀に亘り勢力をほこつたとされています。古代に想いを馳せながら、生活を豊かに彩った作品をご鑑賞ください。



《テラコッタ 男子頭部》紀元前3-2世紀
本館蔵(イタリア国立ピゴリーニ先史民族博物館寄贈)

赤松麟作

2018年7月6日(金)ー7月18日(水)、7月31日(火)ー9月1日(土)

赤松麟作(1878-1953)は岡山県津山市出身の洋画家です。東京美術学校西洋画科を卒業後は中学校の美術教師を経て大阪朝日新聞社の挿絵画家として活躍し、文展での評価を確立するとともに、画塾で優秀な弟子を多数育成するなど、大阪洋画壇の発展に指導的役割を果たしました。近年、新たに寄贈を受けた関係資料をまじえてその画業をご紹介します。



《雨後(芦ノ湖)》赤松麟作
昭和9年(1934)
本館蔵(玉井濱子氏寄贈)

BIOMBO! —金と墨—

2018年7月31日(火)ー9月1日(土)

BIOMBO(ピオンボ)とは、ポルトガル語やスペイン語で「びょうぶ」(屏風)を意味します。日本の屏風絵が南蛮貿易を通じてはるか異国にもたらされ愛好された名残りをあらかず言葉です。屏風絵の魅力を演出する「金と墨」を対比しながら館蔵・寄託の優品をご紹介します。



《鳥巢図》長谷川等伯
江戸時代・慶長12年(1607) 本館蔵

動物を描く —近世・近代の日本絵画—

2018年7月31日(火)ー9月1日(土)



《唐犬(右扇)》橋本関雪
昭和11年(1936) 本館蔵

身近な動物に対する親しみや珍しいものへの憧れなど、古くから動物は絵画の対象となってきました。本展示では、所蔵・寄託の作品から、近世・近代の画家たちが描いた動物たちをご紹介します。夏のひととき、美術館でその愛らしい姿をお楽しみください。

日本・中国の仏教彫刻

2018年7月31日(火)ー9月1日(土)

中国南北朝時代から明時代にいたる1000年間の仏教彫刻、そして平安、鎌倉時代を中心とする日本の仏教彫刻を一堂に展示します。制作された地域や時代により移り変わる、「ほとけのすがた」をぜひご覧ください。



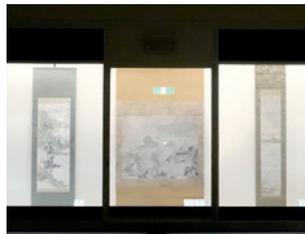
左:《石造 菩薩五尊像龕》
中国南北朝時代・北周
保定5年(565)
本館蔵(山口コレクション)
右:重要文化財
《木造 四天王立像[持国天]》
平安時代・12世紀
大阪・大門寺

インターンシップ活動報告

今年度は、大阪大学大学院で日本美術史を専攻する2名のインターン生を受け入れました。4月からこれまでの間、中国絵画(阿部コレクション)を中心とした館蔵品の調査・写真撮影の補助、コレクション展の展示・撤収作業の補助にあっています。昨年10月のコレクション展「書画にあそぶ」では、来館者の皆様楽しんで鑑賞して頂けるように、わかりやすい作品解説を心がけ、工夫を凝らしました。今後もインターン生の活躍にご注目ください。



展示作業に取り組む様子



完成した展示室(部分)

所蔵作品の貸出

他館への貸出を予定している当館所蔵作品です。展示期間などの詳細は各施設へお問い合わせください。

《人物鳥獣文 綴織覆布》ほか コプト染織品 計33件 姫路市立美術館(姫路市) 2018年2月10日(土)~3月25日(日) 「イメージを織る」	
吳昌碩《山水図》ほか 計3件 関西大学博物館(吹田市) 2018年4月1日(日)~5月20日(日) 「山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—」	
《池大雅二十五回忌追善会案内状》 京都国立博物館 平成知新館(京都市) 2018年4月7日(土)~5月20日(日) 「池大雅 天衣無縫の旅の画家」	
王淵《竹雀図》(阿部コレクション) 東京国立博物館 平成館(台東区) 2018年4月13日(金)~5月27日(日) 「名作誕生—つながる日本美術」	
上村松園《晩秋》(住友コレクション) 水野美術館(長野市) 2018年4月14日(土)~5月27日(日) 「上村松園展」	
《銅造 誕生釈迦仏立像》(田万コレクション)ほか 計6件 龍谷ミュージアム(京都市) 2018年4月21日(土)~6月17日(日) 「お釈迦さんワールド—ブッダになったひと—」	
児玉希望《枯野》 奥田元宋・小由女美術館(三次市) 2018年4月27日(金)~6月17日(日) 「生誕120年 児玉希望展」 富山県水墨美術館へも巡回	
《銅造 大日如来像鏡像》 滋賀県立安土城考古博物館(近江八幡市) 2018年4月28日(土)~6月17日(日) 「神像の成立から武将の神格化へ」(仮題)	

特別展

ルーヴル美術館展 肖像芸術—人は人をどう表現してきたか
2018年9月22日(土)~2019年1月14日(月・祝)

今秋、ルーヴル美術館の全8部門—古代オリエント美術、古代エジプト美術、古代ギリシャ・エトルリア・ローマ美術、イスラム美術、絵画、彫刻、美術工芸品、素描・版画—の協力のもと、「肖像」に焦点を当てた特別展を開催いたします。肖像の制作に臨んだ芸術家たちは、どのような素材や手法を用い、どのような表現を生み出してきたのでしょうか。

本展では、肖像芸術の役割—モデルとなった人物の存在を記憶・記念する、権力を誇示する、あるいはイメージを拡散するなど—を中心に、ルーヴル美術館の豊かな名品の数々をご覧ください。



《女性の肖像》、通称(美しきナーニ)
ヴェロネーゼ(本名パオロ・カリアリー) 1560年頃
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Michel Urtado / distributed by AMF-DNPartcom

◆表紙作品紹介

《愛染明王像》室町時代・15世紀 本館蔵(田万コレクション)

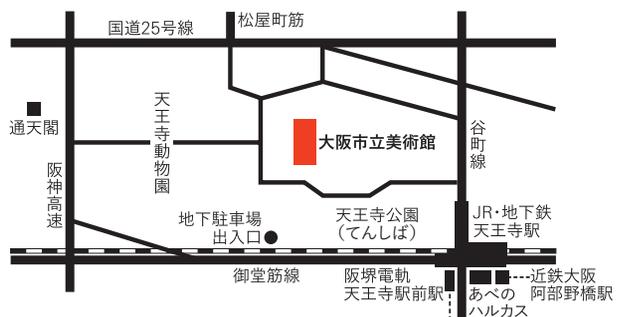
愛染明王は愛欲の煩惱がそのまま仏心に通じることを示し、迷える衆生を救う密教の尊像。姿は『瑜祇経』に依拠し、忿怒の顔、六手の腕、深紅の体を持つ。和合・親睦を祈願する、敬愛法に用いられたと考えられる。円相内の炎のゆらめきが優雅に表現された作品。

大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82
tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856
<http://www.osaka-art-museum.jp>

開館時間=9:30~17:00(入館は16:30まで)
休館日=月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌平日)



交通案内:地下鉄御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または市バス「あへの橋」下車、北西へ約400m